

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

恋の病～潔癖なふたりのビフォーアフター～
(怪胎/i WEIRDO)

2020年/台湾映画

配給：エスピーオー、フィルモット/100分

2021 (令和3) 年7月1日鑑賞

オンライン試写

Data

監督・脚本：リャオ・ミンイー

出演：リン・ポーホン/シエ・シン
イン (ニッキー・シエ) /チ
ヤン・シャオファイ

👁️👁️ みどころ

台湾のアカデミー賞と呼ばれる第57回金馬奨で6部門にノミネートされながら、『1秒先の彼女 (消失的恋人節)』(20年)と『親愛なる君へ (親愛的房客)』(20年)に敗れ、無冠に終わったのが本作。

『1秒先の彼女』とともに本作のユニークさは際立っている。そもそも、原題の『怪胎』って一体ナニ？凹凸コンビの物語は多いが、邦題どおりの奇妙な物語から考えさせられることは多い。

美男美女の恋物語の対極にある、“怪胎”(=異常者?) 同士の恋模様は如何に？そのビフォーvs アフターを、しっかり確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ “怪胎”とは？こんな凹凸コンビが主人公に？■□■

凹凸コンビの物語は多いが、「潔癖症&不器用な彼と、潔癖症&窃盗症の彼女 運命的な出会いを果たしたカップルに巻き起こる奇怪千万な恋！」を描いた本作は珍しい。

ポーチン (林柏宏 (リン・ポーホン)) は、家では隅々まで徹底的に掃除し、外出するときは防塵服を着て手袋とマスクをするほどの完全武装をする、重度の潔癖症の青年。彼がある日、電車に乗る姿は、まさに原題の『怪胎』どおりの“変人”だ。そんなポーチンに対して、もう1人の主人公、ジン (謝欣穎 (シエ・シンイン、ニッキー・シエ)) は？

台湾のアカデミー賞と呼ばれる第57回金馬奨では、『1秒先の彼女 (消失的恋人節)』(20年)が作品賞、監督賞、脚本賞、編集賞、視覚効果賞の5部門を、『親愛なる君へ (親愛的房客)』が最優秀主演男優賞、最優秀助演女優賞、最優秀オリジナル音楽賞の3部門を受賞した。本作も最優秀主演男優賞と最優秀主演女優賞を含む6部門にノミネートされていたが、無冠に終わったらしい。それは残念だが、その内容には興味津々。

■□■ 2人の出会いは？モーションがけはどちらから？■□■

ある日、ポーチンが電車に乗っていると、同じ車両内に同じような“完全武装”をした女性、ジンを見発見。思わず(?)南京復興駅で降りた彼女の後をつけたポーチンは、潔癖症のジンがスーパーマーケットでチョコを万引きするのを発見。ポーチンは潔癖症で不器用なだけだが、ジンは潔癖症の上に窃盗症もあるらしいから、更に大変だ。そんな2人は、2人とも「自分は一生、他人と隔離してひとりぼっちで生きていくのだ」と自覚していたが、万引きの現場で“運命の出会い”を果たした2人の、その後は?

小中学校では、肉体の成長は女子の方が男子より早い、同じ潔癖症でも、女性の方が男性より“その方面”の成長は早い(?)らしい。そのため、屈託なく「私が好き?」と、“その方面”のモーションをかけてきたのは、ジンの方だ。その他、デートの約束、自宅への招待等々、ジンの屈託ない言動に、ポーチンは「このイカれた子は、僕をドキドキさせる」とメロメロに。その結果、ジンがポーチンの家に引越し、2人は同居することに。

似た者同士(?)の仲良し同棲生活(?)は一見順調そうだが、キスの仕方を巡ってもどこか不自然だから、その前途には不安もいっぱい・・・。

■□■ある日、潔癖症が完治!そりゃ、めでたいが・・・■□■

「おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」、それがおとぎ話の世界だ。また、「男は外で仕事を、女は家で家事を」、それが昭和の時代の日本だ。それはそれなりにマッチしていたわけだが、ポーチンが出版社の編集者として働き始めると、2人(だけ)の生活は少しずつ変容していくことに。もちろん、それは2人で相談した上での決定だったが、職場の若い女性メイユー(チャン・シャオファイ)との接触や、外での会食が増えていくと・・・。その結果起きる夫婦喧嘩(?)のサマは一般的なものだが、本作でユニークなのは、そんな激変中、なぜかポーチンの潔癖症が治ってしまうことだ。

本来、それはおめでたいことだが、そうなると、2人はもはや一緒にいられないことに? 「僕は正常になったんだ!」、「すると、私は異常?私はおかしい?」。それが、2人の究極の“売り言葉”に“買い言葉”の喧嘩だが、その判定は如何に?

■□■正常者 vs 異常者。そんな変わった構造が顕著に! ■□■

この奇妙な映画はどうなっていくの?どんな結末を迎えるの?そう思いながら見ていると、今やすっかり仲良しになったポーチンとメイユーが2人でスーパーに入っていく姿を目撃したジンが思わずその後をつけていくシークエンスになる。そんなジンを見て、メイユーがポーチンに「知ってる人?」と尋ねたが、それに対するポーチンの答えは、何と・・・。これは、結構ヤバいのでは?

日本では「家守」もしくは「守宮」と書くヤモリは、縁起のいいものとされている。それと同じように、台湾では「壁虎(ビーフー)」と書くヤモリは、台湾でも縁起のいいものらしい。私は、それを『1秒先の彼女(消失的恋人節)』(20年)ではじめて知った。同作には本物?それとも幻覚?そんな形でヤモリが登場していたが、本作でも、なぜかきれいに拭いたはずの窓にヤモリが登場し、ポーチンにも、ジンにも、これは本物?それとも幻覚?そんなシークエンスになるので、それに注目!

■□■愛さえあれば欠点も長所に！そう思うのだが・・・■□■

映画は、回想シーンをいつでもどこでも使えるから便利な芸術。また、あっちの回想シーンとこっちの回想シーンをくっつけることも可能だから、何でもオーケーだ。『1秒先の彼女』のストーリーも、何でもありのハチャメチャぶりが面白かったが、奇妙な設定で始まった“純愛モノ”たる本作の結末は如何に？

潔癖症が治癒したボーチンは、今や正常。「元の病気に戻してくれ！」と医者にもお願いしてもそれは無理だったのだから、正常者への復帰は喜ぶべきことだ。しかし、そのことは、片や今なお深刻な病状にあるジンとは、“正常者” vs “異常者”のまますれ違っていくことを意味しているの？つまり、愛がある間はお互いの欠点も長所になっていたが、愛がなくなれば・・・？「そんなもんだよ！」と言ってしまえばそれまでだが、それってあまりに寂しすぎるのでは？

2021（令和3）年7月5日記